

タイ人日本語通訳者の異文化能力と異文化間コミュニケーション能力についての考察

A Study of Intercultural Competence and Intercultural Communication Competence of Thai Japanese Interpreters

ケーオキッサダン パッチャラポーン
Patcharaporn Kaewkitsadang

タマサート大学 教養学部
Faculty of Liberal Arts, Thammasat University

Corresponding Author:

Patcharaporn Kaewkitsadang
Faculty of Liberal Arts, Thammasat University
2 Phrachan Road, Phra Nakhon District, Bangkok 10200, Thailand
E-mail: patcharaporn.k@arts.tu.ac.th

Received: May 12, 2024

Revised: July 12, 2024

Accepted: August 13, 2024

タイ人日本語通訳者の異文化能力と異文化間コミュニケーション能力についての考察¹

要旨

本研究は異文化能力・異文化間コミュニケーション能力に着目し、タイ人日本語通訳者の異文化に対する理解及び異文化間コミュニケーション能力を明らかにすることを旨とするものである。研究方法は定性調査の分析である。一般企業、サービス業、医療現場で働くタイ人日本語通訳者を対象にデプスインタビューを行い、インタビュー調査から得られたデータの分析及び考察を行った。調査に協力した 30 名のタイ人日本語通訳者の平均年齢は 36 歳、平均通訳経験は 10 年であり、日本語能力は JLPT N2 レベル以上である。

自己評価の調査の結果、タイ人日本語通訳者は自己の異文化能力・異文化間コミュニケーション能力に関して「良い」と評価していることが明らかになった。インタビュー調査の結果、1) 知識の面では、社会規範、文化、言語及びコミュニケーション形式、言語と社会文化の関係に関する知識を持つこと、2) 態度の面では、自己の文化に固執しない、異文化の理解と受け入れに努める姿勢が見られること、3) スキルの面では、自己の文化を他の文化と関連付ける能力、知識、態度、及びスキルを持ち、出来事を説明したり、即応性のあるコミュニケーションをしたりすることができること、また、自己及び他者の文化的価値を客観的・批判的に評価し判断できることがわかった。

本研究の結果は異文化に関する知識、文化的意識の向上を促進し、異文化間コミュニケーション教育、通訳教育の発展への一助となるだろう。

キーワード：異文化能力、異文化間コミュニケーション能力、タイ人日本語通訳者、知識、態度、スキル

¹ 本研究はタマサート大学研究倫理委員会によって承認された。研究倫理承認番号 COE No. SSTU-EC192/2566
本研究は東芝国際交流財団 2023 年度研究助成を受けたものである。

A Study of Intercultural Competence and Intercultural Communication Competence of Thai Japanese Interpreters²

Abstract

This study investigated the intercultural competence and intercultural communication competence of Thai Japanese interpreters. Qualitative research was done with data gathered by in-depth interviews with thirty Thai nationals who worked as Japanese language interpreters in general business enterprises, service industries, and healthcare service industries. Samples, whose Japanese language proficiency level was N2 or higher according to the Japanese-Language Proficiency Test (JLPT), had an average age of 36 and average professional experience of 10 years.

Results from self-assessment surveys showed that samples rated their intercultural and intercultural communication abilities as “good”. Interview findings indicated that samples demonstrated 1) knowledge about social norms, culture, language, communication patterns, and the relationship between language and sociocultural aspects; 2) an open and accepting attitude toward understanding and accepting different cultures instead of being limited by their own culture; 3) an ability to interpret their culture to others, possessing the knowledge, attitude, and skills to explain events and engage in responsive communication as well as objectively and critically evaluate their own and others’ cultural values.

These findings may help enhance knowledge, intercultural understanding, and cultural awareness and facilitate the development of intercultural communication education and interpreter training.

Keywords: intercultural competence, intercultural communication competence, Thai Japanese interpreters, knowledge, attitudes, skills

² This research has been approved by the Research Ethics Committee, Thammasat University for research ethics COE No. SSTU-EC 192/2566.

This research has been supported by research funding from Toshiba International Foundation Fiscal Year 2023.

1. はじめに

日本貿易振興機構の2020年のデータによれば、タイにおける日本企業は合計5,856社であり(JETRO, 2021)、また、タイに在住する日本人の数は短期及び長期の両方を合わせて72,308人に達しており、毎年増加の傾向にある(Ministry of Foreign Affairs of Japan, 2023)。日本人のビジネス上の交流や移住において、異文化間コミュニケーションは不可欠であり、極めて重要である。このため、翻訳及び通訳は、ビジネスや社会の文化的文脈における異文化間の媒介手段として重要な役割を果たしている。

現在、人工知能技術が翻訳や通訳に広く活用されているが、人間のコミュニケーションは言語と文化的背景の双方に基づいているため、人工知能技術が通訳の代替として機能することはまだ完全にはできていない。発せられる言葉、つまり言語にも、非言語コミュニケーションにも意味と同時に文化的な背景が含まれている。通訳者は話し手が伝えたいメッセージを聞き手が理解できるように通訳する必要がある。そのため、通訳者には起点言語と目標言語の両方に精通していることだけでなく、文化的な理解や異文化間コミュニケーション能力も必要である。更に、時には通訳者には会話の流れをコントロールし、双方が円滑に交渉できるようサポートする役割も求められる。文化が異なる人同士のコミュニケーションにおいて、非言語コミュニケーションも含め、相互が理解し合えるようサポートする通訳者の存在は不可欠である。通訳者は単なる言語翻訳機以上の存在であると言える。そのため、本研究では翻訳ではなく通訳に焦点を当てることにした。

日本語とタイ語の通訳に関する研究はこれまでも行われてきたが、その研究のほとんどは、通訳者のニーズ調査、通訳の全体的な問題調査、言語上の問題(บุษบา บรรจงมณี, 2547; มธุรส แพทย์ชีวะ และ ชีโนฮาระ โนบุอากิ, 2562) や、通訳ストラテジー(กนก รุ่งเกียรติกุล, 2566)に関するものである。異文化能力や異文化間コミュニケーションに関する研究は管見の限り、見当たらない。

本研究は、通訳者の異文化能力・異文化間コミュニケーション能力に着目し、多文化共生社会である現代において通訳の能力として求められるものは何か、通訳の果たす役割とは何かを分析し、タイ人日本語通訳者の異文化に対する理解及びコミュニケーション能力について考察することを目的とする。

2. 異文化能力・異文化間コミュニケーション能力

言語能力(Language competence)と比較すると、異文化能力(Intercultural competence:IC)は、包括的で抽象的な性質を持ち、明確に定義することが困難である。異文化間コミュニケーションに関する研究の先駆者であるといわれるByram(1997)は、異文化能力を自言語で国や文化が異なる人とやりとりをする能力とし、異文化間コミュニケーション能力(Intercultural communication competence:ICC)を他言語を運用し、国や文化が異なる人とやりとりをする能力としている。つまり、異文化間コミュニケーション能力とは、母語以外の言語能力と異文化能力を用いて、国や文化が異なる他者とやりとりすることができる能力のことであると言えよう。また、異文化間コミュニケーション能力は言語に関する言語能力・社会言語能力・談話能力と文化に関する異文化能力によって成立するとし、以下の5つの要素があると述べている。

- 1) 知識(Knowledge)：自文化及び他文化に関する社会文化的知識
- 2) 態度(Attitudes)：好奇心、寛容さなど
- 3) スキル(Skills)：

3.1) 解釈・関連付けのスキル(Skills of interpreting and relating) : 他文化を解釈し, 説明し, 自文化と結び付ける能力

3.2) 発見・相互交流のスキル(Skills of discovery and interaction) : 新知識を取得する能力, 実際のコミュニケーションの中で知識・態度・スキルを運用する能力

3.3) 批判的スキル/政治教育(Critical cultural awareness/Political education) : 文化の価値観を客観的・批判的に評価する能力

近年では, Byram (1997)の異文化間コミュニケーション能力の定義及び構成要素が多く研究者によって引用及び応用されている(Chen, 2014; 竹井[他], 2021)。外国語教育の場では, ベトナムの高等教育機関における EFL 教室で異文化能力の認識を高めるための取り組みと異文化能力を高める上での課題を追求したHo (2009)などが挙げられる。また, 異文化能力と異文化間コミュニケーション能力の指標や評価方法の構築を行った研究も見られる。松浦・宮崎・福島(2012)や松本(2013)では異文化能力と異文化間コミュニケーション能力の指標の構築への試み, Deardorff (2006)では異文化能力の評価方法モデルが提示されている。タイの外国語教育への応用では, EFL クラスでの英語教育に異文化間コミュニケーション能力の理論を応用する活動の提案(ปนัดดา ศิริพานิช และ นุราธิมาะ โมเอ็ด ยูโซฟ, 2561) や国際プログラムの学生の異文化間コミュニケーション学習能力の調査(Thanakorn et al., 2020) などが見られる。

本研究では, Byram (1997) の異文化能力及び異文化間コミュニケーション能力の定義に従い, 異文化能力に言語能力を加えた能力を異文化間コミュニケーション能力とする。

3. 通訳研究

通訳の業務は古代から行われており, 二十世紀初頭に, 職業の一つとして確立された。言語間のコミュニケーションにおける通訳の重要性への言及は, 1930年代のヨーロッパでの研究に遡る。1930年代から1940年代にかけて, ヨーロッパの大学で通訳の教育が始まり, 「通訳研究」という用語が国際的に普及した(Pöchhacker, 2010)。日本における通訳に関する研究は, 最初は翻訳の一分野と見なされていたが, 1950年代からは, アメリカ合衆国で研修や視察が行われるようになり, 通訳を翻訳から独立した分野とする研究が増加した。1990年代以降, 通訳研究と他の分野との統合が見られるようになり, 異文化社会のコミュニティ通訳やコミュニケーション研究との関連が強化された(鳥飼, 2021)。

通訳の理論的アプローチは, 1950年代から, 通訳者の訳出プロセスの認知的な側面に対する関心が高まり, 1960年代から1970年代にかけて研究者たちが同時通訳に関する様々な実験を行い, 通訳の認知的プロセスを解明しようとした。通訳者養成に関する研究については, 通訳プロセスの仕組みや通訳教授法に関する理論が提唱された。その中でも, 特に影響力が大きかったのは, パリ学派のセレスコヴィッチとレデラが提唱した「意味の理論(Theory of sense)」である。この意味の理論は, ナイダとテイバーの翻訳理論から発展したものである。彼らは, 翻訳を行う際, 元の言語を単語ごとに翻訳するのではなく, 読み手が理解できるように, 新しい形で目標言語に再構築するべきであると述べている。また, 良い翻訳は, 翻訳されたものだと感じさせないと述べている(Nida & Taber, 1969/2003)。

「意味の理論」によると, 通訳者は「意味を聞く」とされている。通訳のプロセスは, 主に3つの段階で構成されている。1) まず, 通訳者は聞いた発話の内容を自分が持つ知識に照らして「理解」し,

声の調子、表情、コミュニケーションの場面、状況などの文脈の意味を把握する。その際、話し手が伝えたい意味を定義する上で言語以外の要素が重要な役割を果たす。2) その意味ユニットを取り出して、「非言語化」する。3) 最終的にそれを「目標言語で表現する」というものである。つまり、起点言語の言語的形式を忘れて、意味のみに焦点を当て、その意味を表す心的イメージを目標言語で表すという考え方である (ธรรทิพย์ แก้วทิพย์, 2545; 鳥飼, 2021)。通訳が成功するか否かは、内容を正確かつ適切に伝達できるかにかかっている。そのため、言語自体を理解すると同時に、言語が使用されている社会の文化を理解することが重要である。

先行研究によると、タイでは、現時点では通訳の基準が定められておらず、認定試験もないが、通訳者は、言葉だけでなく文化的文脈も理解する必要があるため、優れた言語能力、通訳に関する専門知識、文化の理解、職業倫理が求められる (บุษบา บรรจงมณี, 2549; 関根, 2020; 鳥飼, 2021; 小松, 2022)。また、通訳者は、単なる言葉の翻訳機ではなく、円滑で効果的なコミュニケーションの橋渡し役でもある。

機械による翻訳や通訳が様々な分野で活用されている現在、ณัฐริธา ทับทิม (2564) のような日本語・タイ語機械翻通訳に関する研究も出ている。しかし、人間の発する言葉には機械による翻訳や通訳では対応できない文化的暗示的な含意が多い。また通訳の役目として、話し手と聞き手の双方が理解し合い、その場で速やかな交渉ができるように会話の流れをコントロールしたり、双方に妥協させたりして、交渉を成功へと導く仲介者となることも求められる。そのため、通訳者は起点言語と目標言語の双方に堪能であることはもちろん、異文化理解能力及び異文化間コミュニケーション能力も必要となる。

4. タイにおけるタイ人日本語通訳者に関する研究

タイ国内での通訳に関する研究も翻訳学の一分野としてなされていたが、2000年以降は、日タイ通訳に関する研究が増加している。บุษบา บรรจงมณี (2547), วรณิดา ยืนยงค์ และ สมเกียรติ เขวงกิจจวนิช (2562), Yamamoto (2020), ณัฐริธา ทับทิม (2565), กนก รุ่งเกียรติกุล (2566ข) などが挙げられる。その多くは通訳者のニーズや通訳の全体的な問題調査、生産業の通訳、言語上の問題に関する研究である。医療通訳に関する研究、例えば、สิริขวัญ สงวนผล (2555), Nishikito (2017), มธุรส แพทย์ชีพ และ ชีโนฮาระ โนบุอากิ (2562) などもあるが、研究の焦点は通訳者のニーズや通訳者の直面している問題の調査に関するものが主である。社会文化的な側面に焦点を当てた研究は นันทชญา มหาจันทร์ (2556), รัชณี ปิยะดำรงชัย (2561) が挙げられるが、非常に少ない。タイ人日本語通訳者に関する研究の結果は次のようにまとめられる。

4.1 タイ国内における日本語通訳者の需要

タイ国内で最も多くタイ人日本語通訳者が必要とされる現場は、産業の現場、特に工場である。企業など他の現場では、需要が減少している。これは、経営者や従業員が英語でコミュニケーションを取ることができるようになってきたためだと考えられる (บุษบา บรรจงมณี, 2547)。また一方で、医療通訳の需要は高く、今後ますます高まると考えられる (มธุรส แพทย์ชีพ และ ชีโนฮาระ โนบุอากิ, 2562)。

4.2 タイ人日本語通訳者に求められるもの

บุษบา บรรจงมณี (2549) と กนก รุ่งเกียรติกุล (2566ก) は、タイ人日本語通訳者に求められるものとして以下を挙げている。

- 1) 優れた言語能力があること
- 2) 多岐にわたる知識を持っていること
- 3) 認知的能力・スキルを持っていること
- 4) 文化を理解していること
- 5) コミュニケーション能力を持っていること
- 6) 良好な人間関係を作るスキルを持っていること
- 7) 通訳の職業倫理を持っていること
- 8) 心身共に健康であること

สิริขวัญ สวงผล (2556) は、一般的な通訳とは異なる通訳である医療通訳者の望ましい特性をまとめた。その特性とは、タイと日本の文化と健康保険制度の違いを理解していること、奉仕の精神があること、感情をコントロールできること、血液に対する恐れがないこと、コミュニケーション能力を持つことである。医師は通訳者に、正確に通訳すること、基本的な医学知識があること、即座に通訳できる能力があることを期待している。一方、日本人患者は、通訳者が基本的な医学知識を持ち、正確かつ完全に通訳し、患者の要求に応え、礼儀正しい言葉遣いを使用することを期待している。

4.3 タイ人日本語通訳者の直面している問題

タイ人日本語通訳者の直面している問題は、主に以下の4つの項目にまとめられる。

1) 言語の問題

多くの研究で、タイ人日本語通訳者が特に専門用語などの言語の問題に直面していることが指摘されている。例えば、意味を理解できない、目標言語に通訳できないという問題がある (บุษบา บรรจงมณี, 2549; สิริขวัญ สวงผล, 2556; วรณิดา ยืนยงค์ และ สมเกียรติ เขวงกิจวงนิช, 2562; ณัฐริภา ทับทิม, 2565)。また、聞き取りの問題もあり、時間内に聞き取れない、理解できないという問題が挙げられている。しかし、通訳者がその分野での経験を積むにつれて、専門用語や仕事内容に慣れて、問題が減少する傾向にあることが指摘されている。วรณิดา ยืนยงค์ และ สมเกียรติ เขวงกิจวงนิช (2562) によると、新人通訳者は言語やコミュニケーションの問題にぶつかりやすいが、プロの通訳者は言語や専門用語の問題よりも、タイ人とのコミュニケーションに関する問題により多くぶつかっているという。また、นันท์ชญา มหาจันทร์ (2556) は、日本人の視点に注目し、タイ人通訳者が専門用語を誤って通訳した場合でも、日本人はそれを大きな問題とは見なしておらず、時間が経てば改善すると考えていると述べている。

2) 知識の問題

多くの場合、通訳者は特定の分野に関する知識の不足から通訳できないという問題にぶつかる (บุษบา บรรจงมณี, 2547)。企業に所属している通訳者には、会社内の経営管理や多岐にわたる業務に関する知識が求められる。医療通訳の場合、医学の基本知識が不可欠である。通訳者が通訳できない

場合、それは医学の基礎的な知識の不足が原因であることが多い (ฐนิตา สุวรรณกิตติ, 2551; สิริขวัญ สงวนผล, 2556)。

3) コミュニケーションの問題

ある一定期間、通訳業務を行うと、通訳者は専門用語や業務内容に慣れ、言語や知識に関する問題は減少する。しかし、新人通訳者であろうと、ベテラン通訳者であろうと、コミュニケーションに関する問題にはぶつかることがある (วรรณิตา ยืนยงค์ และ สมเกียรติ เขวงกิจวงนิช, 2562)。コミュニケーションには文化的側面も含まれており、日本語とタイ語の通訳を行う際、ミスコミュニケーションが頻繁に発生する (มรุรส แพทย์ชีพ และ ชีโนฮาระ โนบุอากิ, 2562)。特に、通訳者が文化的な違いや文脈を理解できないと誤解が生じる (นันทัชญา มหาจันทร์, 2556)。医療通訳の場合、主な問題はコミュニケーションに関するものである。通訳者は優れた言語能力を有することに加えて、文化理解ができ、患者との対応方法や患者の精神状態を理解し、正確かつ適切なコミュニケーション方略を選択する能力が必要である (สิริขวัญ สงวนผล, 2556; Nishikito, 2017)。つまり、通訳者には、単なる言語翻訳機という役割ではなく、日本人とタイ人の間のコミュニケーションを助ける役割が期待されている (พัชยา โสภณสิทธิพงษ์, 2560)。

4) その他の問題

通訳者が直面しているその他の問題としては、1) 人間関係の問題、すなわち、通訳者を利用する側が通訳者を信頼せず、偏見を持つこと 2) 心理的な問題、ストレスやプレッシャーがかかること 3) 生活の問題、従業員と通訳者が不足しているために通訳以外の仕事が割り当てられたり、休日に仕事をしなければならなかったりすることが挙げられる (Watanabe, 2012 ; สิริขวัญ สงวนผล, 2556; Nishikito, 2017)。

このように、通訳者は、正確かつ完全な通訳ができること、専門分野の知識があること、適切な言語でコミュニケーションができることが期待されている。通訳の利用者は通常、言語能力を最優先し、文化的な側面を二の次にする傾向にある (Yamamoto, 2020)。新人通訳者は言語、専門用語、業務内容に関する問題にぶつかることがあるが、通訳経験が豊富になると、これらの問題は減少する。一方で、コミュニケーションにおいて、ベテラン通訳者でも文化的な違いや文脈の理解に関する問題にぶつかることがある。

良い通訳者になるためには、異文化間コミュニケーション能力が必要である。しかし、タイ人日本語通訳者の異文化・異文化間コミュニケーションに関する研究は少ない。そのため、本研究では通訳者の異文化・異文化間コミュニケーション能力に焦点を当て、調査及び分析を行うことにした。本研究の目的は、タイ人日本語通訳者の異文化能力及び異文化間コミュニケーション能力はいかなるものか、また、その重要性を認識しているかを明らかにすることである。

5. 研究方法

研究方法は定性調査の分析である。一般企業、サービス業、医療現場で働くタイ人日本語通訳者を対象にデプスインタビューを行い、インタビュー調査から得られたデータを文字化し、分析及び考察を行う。調査に協力した 30 名のタイ人日本語通訳者の平均年齢は 36 歳、

平均通訳経験は10年であり、日本語能力はJLPT N2 レベル以上である。研究方法はさらに、定性分析に加えて、定量分析も行った。定量分析では、異文化能力・異文化間コミュニケーション能力の自己評価を10点満点で数値化し、平均値とt検定の値を示す。

5.1 対象サンプリング方法

本研究では、目的抽出法 (Purposeful sampling) を使用する。このサンプリング方法は、選択された調査対象やデータが研究目的に関連する特性を持っていることを確認するために、質的研究によく使用される方法である (Palinkas et al., 2015)。サンプリング方法は以下の通りである。

- 1) オンラインネットワークを介して通訳者からデータを収集する。
- 2) 調査対象の候補になる通訳者 (サンプルグループ) と連絡を取り、データ提供者として適格か否かを次の基準に基づいて判断する。
 - a. 通訳経験が3年以上であること
 - b. 通訳が主な業務であること
 - c. タイ語から日本語、及び日本語からタイ語の通訳が可能であること
 - d. 年齢が20-59歳であること
 - e. 日本語能力試験 (JLPT) N2 以上であること
 - f. 学士号以上の学歴を有すること

この基準は「4. タイにおけるタイ人日本語通訳者に関する研究」の「3) コミュニケーションの問題」で言及した、ベテラン通訳者でもコミュニケーションに関する問題にぶつかることがあり、特に、通訳者が文化的な違いや文脈を理解できないと誤解が生じるという先行研究の結果を参考に定めた。つまり、新人ではないタイ語・日本語の通訳者であること (通訳経験が3年以上の通訳者)、十分日本語能力を持っていること (日本語能力試験 (JLPT) N2 以上)、日本語または日本学関係の学士課程以上の修了者であること、そして、研究倫理の理由により年齢が20-59歳であることを調査対象者の条件にした。

3) 研究目的を説明し、データ提供者にインタビューのサンプル質問を送り、インタビューに協力してもらえるかどうか確認する。

- 4) インタビューの日時を設定し、インタビューを行う。

今回、45人のサンプルグループから協力を得たが、何人かのサンプルグループメンバーはインタビューのサンプル質問に回答したものの、実際のインタビューには参加しなかった。そのため、今回の研究のデータ提供者は合計30人となった。データ提供者はさまざまな分野で通訳業務をしており、1人の通訳者が複数の分野にまたがっている場合もある。通訳の分野は次の通りである。

- a. 一般ビジネス (産業企業, 商社)
- b. サービス業 (イベント, マーケティング, ホテル, レストラン)
- c. ヘルスケアサービス (病院, 公共の医療サービス機関)

インタビュー時間は1人につき約1時間で、インタビューの合計時間は約30時間である。インタビューで行ったデータ提供者への質問は以下の通りであるが、状況に応じて、適宜質問を追加した。

第1部: データ提供者の基本的な情報 (年齢, 学歴, 日本語能力 (JLPT), 英語能力, 通訳経験, 通訳の分野)

第2部：通訳，自己評価，異文化能力・異文化間コミュニケーション能力に関する質問

- a. 通訳の仕事，役割，問題
- b. 異文化能力・異文化間コミュニケーション能力の自己評価
- c. 異文化能力・異文化間コミュニケーション能力に関する 1)知識 2)態度 3)スキル

なお，本研究では，a. 通訳の仕事，役割，問題については言及せず，異文化能力・異文化間コミュニケーション能力に焦点を当てる。

5.2 研究ツール

インタビュー調査はデプスインタビューの形式で行う。インタビューの構造は，第1部：データ提供者の基本的な情報を確認し，データ提供者としての選択基準に合致するかどうかを確認する，第2部：Byram (1997) に基づいた通訳，自己評価，異文化能力・異文化間コミュニケーション能力に関する質問をする，という二つの部分からなる。

5.3 データ収集

データ収集は，直接の対面式インタビューまたは ZOOM を介した約 1 時間の個別インタビューによって行う。インタビューの音声を文字化し，データを分析・考察する。

5.4 データ分析

インタビューから得られたデータは，意味を解釈する分析方法を用いて内容分析(Content analysis)をし，カテゴリに分類する。コーディング(Coding)とカテゴリ分類(Categorizing)によってデータを分析し，関連する情報をグループ化する (Gray & Densten, 1998 ; Popping, 2015)。

5.4.1 定義の設定

Byram (1997) に基づいて以下のように各用語を定義する。

1) 「知識」は，自文化及び他文化に対する社会文化的知識，社会システム，社会規範，特定の社会文化のコミュニケーション形式に関する知識，言語と行動に関する知識に下位分類する。

2) 「態度」は，好奇心，寛容さ，学習意欲，異文化間の違いを理解し，自己の文化に固執せず相手の行動や信念を尊重する態度，相手の行動や信念を受け入れる態度，相手の行動や信念を分析する態度に下位分類する。

3) 「スキル」は，異文化間のコミュニケーションを可能にするスキルであり，次のように下位分類する。

3.1) 解釈及び関連付けスキル：自己の文化と他者の文化を関連付けて解釈し，出来事や両者の関係性を説明する能力

3.2) 発見・相互交流のスキル：新知識を取得する能力，実際のコミュニケーションの中で知識・態度・スキルを運用する能力

3.3) 批判的スキル：自己と他者の文化の価値を客観的に評価し，明確な評価基準に基づいて批判的に評価する能力

5.4.2 意味解釈

データは重要な意味に焦点を当て、記録する。例えば、TJI-24(TJI=Thai Japanese Interpreter)の「普段から他者の助言を受け入れ、常に学び、改善しようとしています」という発言を「常に助言を受け入れ、常に学び、常に改善している」と記録する。

5.4.3 コーディング

コーディングは、5.4.2の意味を取り上げ、分類するために行う。例えば、TJI-24の、「常に助言を受け入れ、常に学び、常に改善している」を「常に受け入れ」、「常に学ぶ」「常に改善」にコード化する。

5.4.4 カテゴリ分類

カテゴリ分類は、5.4.3のコードを関連付け、同じテーマの要素をまとめて同じカテゴリの下に配置する作業である。例えば、「常に受け入れ」、「常に学ぶ」「常に改善」は、「態度」のカテゴリに分類する。意味解釈、コーディング及びカテゴリはByram (1997)の異文化能力・異文化間のコミュニケーション能力の要素に基づいて分析する。

6. 結果の分析と考察

6.1 データ提供者の情報

表1 年齢

年齢	20-29 歳	30-39 歳	40-49 歳	50-59 歳	合計
人数	8	14	4	4	30
%	26.67	46.67	13.33	13.33	100.00

表2 日本語・英語能力

レベル	日本語		英語	
	JLPT N1	JLPT N2	TOEIC/TOEFL/TU-GET	NO-EG
人数	9	21	20	10
%	30.00	70.00	66.67	33.33

表3 通訳経験

通訳勤務年数	3-5 年	6-10 年	11-15 年	16-20 年	合計
人数	8	10	6	6	30
%	26.67	33.33	20.00	20.00	100.00

データ提供者は合計 30 人で、平均年齢は 36 歳である。年齢別で見ると、20-29 歳は 8 人 (26.67%)、30-39 歳は 14 人 (46.67%)、40-49 歳は 4 人 (13.33%)、50-59 歳は 4 人 (13.33%) である。

日本語能力試験（JLPT）N1 の取得者は 9 人（30.00%），N2 の取得者は 21 人（70.00%）である。また、英語能力（TOEIC/TOEFL/TU-GET など）の資格を持つ人は 20 人（66.67%），持たない人は 10 人（33.33%）である。

通訳経験をみると、通訳経験の平均年数は 10 年で、3-5 年の経験を持つ人は 8 人（26.67%），6-10 年は 10 人（33.33%），11-15 年は 6 人（20.00%），16-20 年は 6 人（20.00%）となっている。

以上をまとめると、データ提供者は、平均年齢 36 歳で、日本語能力試験（JLPT）N2 レベル以上を持ち、通訳経験の平均年数は 10 年である。

通訳の分野に関しては、データ提供者全員が一つの分野ではなく、1）一般ビジネス（産業企業、商社）2）サービス業（イベント、マーケティング、ホテル、レストラン）3）ヘルスケアサービス（病院、公共の医療サービス機関）の分野に跨って通訳業務をしていることがわかった。

6.2 異文化能力・異文化間コミュニケーション能力の自己評価

異文化能力・異文化間コミュニケーション能力の自己評価は次のようにまとめられる。

表 4 異文化能力・異文化間コミュニケーション能力の自己評価

通訳勤務年数	3-5 年	6-10 年	11-15 年	16-20 年	平均	IC・ICC の平均
異文化能力（IC）	7.94	7.60	7.50	8.17	7.78	8.00
異文化間コミュニケーション能力（ICC）	8.00	8.20	8.20	8.42	8.18	
平均差異	0.06	0.60	0.70	0.25	0.40*	

10 点満点

9.00-10.00 = 非常に良い，7.00-8.99 = 良い，5.00-6.99 = 普通，3.00-4.99 = 悪い，0.00-2.99 = 非常に悪い

*有意水準 $p < .05$

30 人のデータ提供者は、異文化能力において、平均 7.78 点（10 点満点），つまり、「良い」と自己評価し、異文化間コミュニケーション能力においても、平均 8.18 点、「良い」と自己評価をした。異文化能力と異文化間コミュニケーション能力を合わせた平均点数は、8.00 点で「良い」と自己評価した。異文化能力の平均は異文化間コミュニケーション能力の平均よりわずかに低いが、その差は 0.40 点（有意差 $p=.033$ ）である。データ提供者が異文化能力に対して多少低く自己評価していることについて、「よく理解していると言える自信がない」「よくわからなくても仕事に影響がない」といった理由が挙げられている。つまり、異文化能力を異文化コミュニケーション能力ほどには重要視していないという傾向がみられる。

<回答例³>

³ インタビューはタイ語で行った。回答例はタイ語から訳したものである。回答例の（ ）内の言葉は回答の内容がよりわかりやすいように筆者が加えたものである。

TJI-4: 文化あるいは伝統文化を理解するということは（仕事と）直接関係ないし、よくわかりません。自信を持ってよく理解しているとは言えません。しかし、その日本人がどのような文化環境で育ったのかを理解できるという点で意味があることのように感じます。

TJI-12: 文化的側面はわからなくても仕事に影響がないと思います。私は日本とタイの両方の文化をあまり理解していない悪い例だと思います。私は日本の文化がよくわかりません。日本でお盆に何をするか聞かれたら、私は答えることができません。しかし、私はここまで来られました。私の仕事である生産業の通訳では（文化理解は）影響がないと思います。

通訳経験で見ると、通訳勤務年数によって、異文化能力及び異文化間コミュニケーション能力の自己評価が異なるとは言いがたい（ $p=.179$ と $p=.381$ ）。しかし、16-20年のベテランの通訳者の異文化能力の平均は8.17点で最も高かった。異文化間コミュニケーション能力においても8.42点で1位である。

自己評価の結果から、経験豊富な通訳者は経験の少ない通訳者より、異文化能力及び異文化間コミュニケーション能力を高く自己評価していることがわかった。

6.3 異文化能力・異文化間コミュニケーション能力の分析

インタビューから得たデータの結果を 1)知識 2)態度 3)スキルの順に分析・考察する。

1) 知識

データ提供者は、世界には複数の言語と多様な文化が共存しており、その社会構成員の価値観や考え方はそれぞれの文化にある価値基盤を反映していること、異なる文化を持つ人との相互作用において、言語や社会文化的背景、歴史に関する知識が重要であること、主要な文化の中にサブカルチャーがあること、文化は常に変化しており、言語接触や文化の交流によってより複雑になること、社会集団や個人のコミュニケーションパターンがあることといった知識を有している。これらの知識を回答件数が最も多かったものから順にまとめると、次のようになる。

1. 1) 社会文化に関する知識

1. 1. 1) 世界には複数の言語と多様な文化が共存しており、その社会構成員の価値観や考え方はそれぞれの文化にある価値基盤を反映していること (30 件)

<回答例>

TJI-1: 日本人とタイ人の違いは、日本人は仕事において責任感や時間厳守が非常に重要だと考えていますが、タイ人はそうではないことです。このような文化的要素がコミュニケーションに影響を与えると思います。例えば、曖昧な拒否表現などです。

TJI-3: 通訳者は、日本とタイでは言語や文化が異なることを理解しています。例えば、日本人は非常に礼儀正しくふるまう傾向があります。他人を尊重しているからです。

1. 1. 2) 異なる文化を持つ人との相互作用において、言語や社会的文化的背景、歴史に関する知識が重要であること (30 件)

<回答例>

TJI-1: 日本企業で働く場合、日本人の日常生活の文化について理解することが重要です。少なくとも、一般的なタイ人社員よりも理解を深めておくべきです。そうすることで、タイ人の社員に、日本の管理職にどのように接すべきかを説明することができます。逆に、日本人の社員には、タイ人と仕事をする際に、理解しておくべき情報を提供することができます。また、日本の伝統文化に関する知識があれば、日本人の話についていけるし、興味があることを共有したり意見を交換したりするのに役立ちます。

TJI-7: 日本に関する研究を読むことで、通訳者は日本人の考え方への理解が深まり、日本人が言いたいことを正確に理解し、通訳できるようになります。例えば、なぜ日本では台所が家から分かれているのか、プライバシーを尊重すること、礼儀正しい行動をすること、集団意識があることなどは、タイとは異なります。

1. 1. 3) 主要な文化の中にサブカルチャーがあること (3 件)

ここでいうサブカルチャーとは管理職と工場で働く労働者のサブカルチャーである。

<回答例>

TJI-5: タイ人は話し方や話の流れがあまりよくないです。順序よく話をするのはあまり得意ではないと思います。しかし、タイ人皆がそうであるとは言っていないよ。話し方が上手ではないのは、だいたい工場で働く人です。言葉遣いも違います。ですから、通訳者は通訳する前に彼らに情報を確認する必要があるのです。

TJI-17: 外国人や通訳者との会話に慣れていない人は、よく長い文で話したり、同じことを繰り返したりします。しかし、管理職ならば比較的短く、明確に話す傾向があります。

TJI-24: 日本語といっても一つではありませんね。方言とか、それぞれの分野の専門用語、言葉遣い、話し方とかありますから、そのサブカルチャーがわからないと話し手が伝えたいことをうまく通訳できないかもしれませんね。

1. 1. 4) 文化は常に変化しており、言語接触や文化の交流によってより複雑になること (3 件)

<回答例>

TJI-2: 現在は、多くのことが変わりました。現実には、大学時代に学んだこととは違っています。例えば、報連相や遠回しな言い方などです。タイに滞在している日本人は、報連相をあまりしません。そして、ストレートに話す傾向があります。

TJI-10: ミーティングや食事の時、普通、上司は上座に、地位の低い人は下座に座りますよね。でも、私の会社では、そんなことはあまり気にしないようです。色々な国籍の人と仕事をしているから、西洋文化、タイ文化の影響で新しい文化が生まれたように思います。

TJI-18: ほとんどの通訳者は、日本とタイの文化の違いを十分理解していると思いますが、現在、多くのことが変わりつつあり、以前学んだこととは違っています。現代の日本人のコミュニケーションパターンも変化しつつあります。例えば、以前と同じように曖昧な話し方をする人もいますが、自分の要求を明確に伝える人も一部います。

1. 1. 5) 価値観, 社会規範, 慣習, コミュニケーションパターンに関する知識 (30 件)

タイ人日本語通訳者は日本文化や日本社会に関する特性として、「責任感がある, 時間厳守, 婉曲表現, 他者への配慮意識, 集団主義, 報連相, 礼儀正しさ, 他者への敬意, 帰属意識, 会社への貢献, 挨拶のマナー, プライバシーの尊重, 感情の表出を控える, 沈黙は金, 慎重」を挙げた。

<回答例>

TJI-13: 通訳者は文化の違いを理解しなければなりません。文化を理解しているかどうかは通訳の仕事に影響すると思います。責任感が強い, 時間厳守, 報連相, 他者への配慮など, 日本人の行動に文化が反映されているからです。日本人と仕事をする際に知っておくべきだと思います。

TJI-11: 時間厳守は, 他者に迷惑をかけないという集団への意識と責任感を表すものだと思います。

TJI-2: 例えば, 会議の場合, 会議の開始時間の少なくとも5分前に会議室に入ります。また, 報連相の習慣に従って, 結果を報告し, 問題などについて相談します。

TJI-3: 日本人は非常に礼儀正しく, 他人を尊重し, 相手に敬意を表します。

TJI-8: 集団行動という考え方は, 日本の集団内での摩擦を避けるためのものだと思います。日本人は何かに不満があっても, あいまいな言葉で表現したり, または何も言わないことがあります。

TJI-12: 私は通訳者ですから, 日本とタイの違いを理解しているつもりですが, 時には, 納得いかないこともあります。例えば, 日本人は仕事が一番重要だと考えているため, タイ人も同様の価値観を持っていると考えてしまうことがあります, タイ人はそうではありません。タイ人は家族や自由時間を大切にしていますから, 仕事が終わったら帰るのは当然です。

TJI-15: 職場でのマナーの中で挨拶は重要です。

TJI-7: (日本では) プライバシーを尊重すること, 礼儀正しい行動をすること, 集団意識があることなどは, タイとは異なります。

TJI-9: 日本人は報連相, 時間厳守を重要視しているから, 私はほとんど遅刻はしないんです。

TJI-24: 日本人は時間を守り, 言葉遣いに注意を払い, 礼儀正しく, 表情などに感情を表さないと思います。

TJI-18: 日本人は時には沈黙で, 拒否や受け入れなどを示すが, タイ人は, その沈黙は受け入れの意味だと解釈する。

TJI-5: 日本のコミュニケーションは「5W2H」のパターンに従って行われます。これは通訳者にとって理解しやすいもので, 慎重に考えてから話すという日本人の性格に由来するものだと思います。

1. 2) 会話相手の言語と行動に関する知識, 社会集団や個人のコミュニケーションパターンに関する知識

データ提供者は, 日本語の基礎知識, 日本語の特性に関する知識, 言語と社会文化的背景の関係に関する知識, また各言語には相違点があり, 独自の言語構造とシステムを持つため文字通りの意味を完璧に通訳することができないという知識, 異文化間コミュニケーションでは誤解が生じる可能性があるという知識を持つ。

1. 2. 1) 日本語の基礎知識, 日本語の特性, 言語と社会文化の関係性, 様々な文脈において日本語を適切に使用することが重要であるという知識(29 件)

<回答例>

TJI-2: 日本語にはさまざまな特性があります。例えば, 敬語や言いさしなどです。これらを理解しないと, 適切に解釈し, 通訳することができないと思います。文脈に応じた適切な言葉の選択が重要だと思います。

TJI-3: 日本語には相づちと呼ばれるものがあり, これは外国人には馴染みがないものなので, タイ人に説明する必要があります。

1. 2. 2) 各言語には相違点があり, 独自の言語構造とシステムをもつため文字通りの意味を完璧に通訳することができないという知識, 異文化間のコミュニケーションでは誤解が生じる可能性があるという知識(25 件)

<回答例>

TJI-1: 言語だけを理解して, 文脈や状況を理解していなければ, 仕事がスムーズに進行しないことがあります。また, 誤った通訳が発生する可能性もあり, 従業員間での誤解を招く可能性があります。例えば, 管理職が日本人の視点で言葉を使った場合, それを直訳するとタイ人は理解できないと思います。ですから, 相手にとってわかりやすい, 文脈に合った適切な言葉遣いや表現を選ばなければなりません。

TJI-4: タイ人は文化的な違いを認識していますが, 実際の仕事の現場で無意識に行動していると思います。しかし, 重要なのは心を開き, 理解しようと努め, 適応することです。それから, 「いいですよ。」を解釈するのはかなり難しいです。というのは, 文脈や状況を理解して通訳しなければ, 誤解されることがあるからです。話し手の性格にもよるかもしれませんが, コミュニケーションの意図を正しく伝えるには, 文脈, 文化理解が必要です。

以上のように, 社会文化に関する知識は日本人とタイ人の異文化間コミュニケーションにおいて重要な要素であることがわかる。

2) 態度

データ提供者は, 好奇心や寛容さ, 学習意欲, 異なる文化の違いを理解しようとする意識を持っている。また, 自己の文化に固執せず, 他者の文化を尊重し, 他の人の信念や行動を尊重する態度を取っている。

2. 1) 異なる言語や文化には類似点と相違点があるのが当然であると認識し, 異なる文化に触れることでその意味や価値を見出そうとする態度(30 件)

<回答例>

TJI-2: その人の個人的な性格なのか, 文化間の違いなのかを理解しながら, 仕事をしています。通訳者は相手の文化を理解し, 相手の文化に合わせて行動しようとしています。例えば, 会議の

場合、会議の開始時間の少なくとも5分前に会議室に入ります。また、報連相の習慣に従って、結果を報告し、問題などについて相談します。

TJI-14: 日本人は時間を守りますが、タイ人は時間にルーズです。タイ人は相手の貴重な時間に敬意を表すべきです。時間厳守はいいことだと思いますので、私はタイ人同士でも約束時間などを守るようにしています。

2.2) 寛容であろうとし、学びに積極的になり、問題解決のために自分の立場や文化を説明して、相手の立場・文化を理解しようとする態度(20件)

<回答例>

TJI-1: 常に心を開き、知識を蓄積する努力を続けることが重要です。

TJI-2: 現在は、多くのことが変わりました。現実には、大学時代に学んだこととは違っています。例えば、報連相や遠回しな言い方などです。タイに滞在している日本人は、報連相をあまりしません。そして、ストレートに話す傾向があります。私は常に状況を理解し、学び、適応する必要があります。

以上のように、通訳者は、異文化間コミュニケーションにおいて、オープンで積極的な態度を有していることがわかる。

3) スキル

異文化間のコミュニケーションを可能にするスキルは、次のように分類される。

3.1) 解釈及び関連付けスキル

自己の文化と他者の文化を関連付けて、解釈し、出来事や両者の関係性を説明する能力(30件)

<回答例>

TJI-2: 日本人はよく曖昧な表現を使いますが、仕事では直接的に明確に話すことがあります。一方、タイ人は時には直接的な表現を避けることがあります。これは批判されることを恐れているからだと思います。

TJI-9: 日本人とタイ人の話し方はかなり違います。日本人は大きいポイント、要点から小さいポイント、細かい情報へと話しますが、タイ人の話し方は整然としておらず、順番を飛ばしたりして、構成や前との関連性を考えずに思い付いたことを話します。これは「自由に、好きなようにする」というタイの文化の特徴の現れだと思います。

3.2) 発見・相互交流のスキル

新知識を取得する能力、実際のコミュニケーションの中で知識・態度・スキルを運用する能力(26件)

<回答例>

TJI-3: 日本語には相槌と呼ばれるものがあり、これは外国人には馴染みがないものなので、タイ人に説明する必要があります。聞き手は、「はい」を同意だと理解することがありますが、反対である場合があります。ですから、状況や文脈をよく読みとる必要があります。文化理解は通訳の仕事

事に役立ちます。例えば、謝罪する際、通訳者は常にタイ人に絶対笑ってはいけないと注意し、その理由を説明しなければなりません。

TJI-5: 日本のコミュニケーションは「5W2H」のパターンに従って行われます。これは通訳者にとって理解しやすいもので、慎重に考えてから話すという日本人の性格に由来するものだと思います。タイ人は話し方や話の流れがあまりよくないです。順序よく話をするのはあまり得意ではないと思います。しかし、タイ人皆がそうであるとは言っていませんよ。話し方が上手ではないのは、だいたい工場働く人です。言葉遣いも違います。ですから、通訳者は通訳する前に彼らに情報を確認する必要があるのです。

3.3) 批判的スキル

自己と他者の文化の価値を客観的に評価し、明確な評価基準に基づいて批判的に評価する能力(26件)

<回答例>

TJI-25: 仕事を始めたばかりの頃、食事会などで文化の違いについてよく考えさせられることがありました。例えば、タイでは食事会の時、管理職の人がそうでない人よりも多くお金を支払うことが一般的ですから、同様に、日本人はタイ人よりも多くお金を支払うだろうと思い、そうすることを日本人に求めます。その際、通訳者が通訳し、お金を要求します。しかし、これは不公平だと思います。管理職の人もそうでない人も、タイ人も日本人も同じ人間だから、同じ金額を払うべきだと思います。また、日本人は時には厳しい口調で仕事を教えることがありますが、これは飴と鞭に例えられる日本人の仕事の指導法だと思います。しかし、タイ人は不満を持ちます。タイ人は、褒められることを好み、顔をつぶされることを嫌います。ですから、タイ人に仕事を教えるときは、褒めてから注意するような方法を用いると効果的だと思います。

TJI-8: 集団行動という考え方は、日本の集団内での摩擦を避けるためのものだと思います。日本人は何かに不満があっても、あいまいな言葉で表現したり、または何も言わないことがあります。そのような場合、通訳者は、タイ人が理解できるように、言葉を選ばなければならないので、よく悩みます。タイ人は不満があったらそれを表現する傾向があると思います。もちろん、タイ人が皆そうだと言っているわけではありません。タイ人はあまり感情をコントロールしないです。感情を顔に出したり、嫌味や皮肉を言ったりすることがあります。これは実際にあったことです。上司が1日に100件の仕事をするように命じました。タイ人の従業員はそれは無理だと思いましたが、口に出さず、大きい音を立てながら、物を片付けたりして、100件の仕事をこなしました。しかし、上司は全くほめませんでした。このような場合、中立であると同時に調整者となる必要がある通訳者は両者のストレスを軽減するように努めなければなりません。

以上のように、データ提供者は、知識の面では、世界には複数の言語と多様な文化が共存しており、その社会構成員の価値観や考え方はそれぞれの文化にある価値基盤を反映していること、異なる文化を持つ人との相互作用において、言語や社会文化的背景、歴史に関する知識が重要であることを認識している。一方、主要な文化の中にサブカルチャーがあることや、文化は常に変化しており、言語接触や文化の交流によってより複雑になるという点については、回答件数が少ないため、あまり知識が

ない、またはあまり認識していないことがわかった。異文化能力は異文化間コミュニケーション能力の核である (Byram, 1997) ことから考えると、タイ人日本語通訳者は異文化能力を持っていると言える。しかし、日本またはタイの文化を単一のものとして一般化せず、サブカルチャーの存在を認識している通訳者や、サブカルチャーについての知識がある通訳者は多くない (3件程度)。また、文化は常に変化しており、言語接触や文化の交流によってより複雑になることを認識している通訳者も多くない (3件程度)。วรรณิดา ยืนยงค์ และ สมเกียรติ เศวงกิจจวนิช (2562) や มธุรส แพทย์ชีพ และ ชีโนฮาระ โนบุอากิ (2562) นันทชญา มหาจันทร์ (2556) で述べられているように、コミュニケーションには文化的側面も含まれており、日本語とタイ語の通訳を行う際、通訳者が文化的な違いや文脈を理解できないと誤解が生じる。このようなコミュニケーション上の問題は、文化の複雑さに対する知識・認識に起因すると考えられる。したがって、通訳の授業で挑戦すべき課題の一つとしてサブカルチャーや文化の複雑さに関する知識・認識を高めることが挙げられる。

態度の面においては、通訳者は、好奇心や寛容さ、学習意欲があり、異なる文化の違いを理解しようと努め、自己の文化に固執せず、他者の文化を尊重し、他の人の信念や行動を尊重する態度をとることがわかった。このような態度は、常に変化し複雑化する文化におけるコミュニケーションの仲介者でもある通訳者にとって必要不可欠なものである。しかし、今までのタイにおけるタイ人日本語通訳者に関する研究ではあまり言及されていない。

スキル面においては、通訳者は、自らの文化と他者の文化との関係を解釈し、言語や文化の相互作用を説明する能力を持っていることがわかった。また、異なる言語や文化の類似点や相違点を観察し、解釈し、批判的に評価する能力を持ち、その知識・能力をコミュニケーションに適用する能力を持っていることがわかった。タイ人日本語通訳者は、双方のコミュニケーションが円滑に進むように努めるべきであるという意識を持ち、コミュニケーションを成功させるために様々な工夫をし、全能力を駆使している。そのため、通訳の授業において日本語・日本文化に関する知識のみならず、日・タイ比較言語・文化に関する知識も与え、解釈能力及び批判的能力を身につけさせることも重要な課題であると言える。

タイ人日本語通訳者は、異文化能力及び異文化間コミュニケーション能力の重要性を認識し、その二つの能力を持つことが通訳業務の成功につながることを認識している。しかし、ベテランの通訳者でもコミュニケーション上の問題に直面することがある。これは、先行研究で、プロの通訳者でもコミュニケーションに関する問題にぶつかることがある (วรรณิดา ยืนยงค์ และ สมเกียรติ เศวงกิจจวนิช, 2562; นันทชญา มหาจันทร์, 2556) と言及されていたことと同じ結果である。しかし、本研究では、経験を積むにつれて、そのような問題が減少する傾向にあることがわかった。したがって、通訳の授業でいかに様々な状況での通訳を経験させられるかが能力向上のために必要な課題だと考えられる。

7. 提案

タイ人日本語通訳者の異文化能力及び異文化間コミュニケーション能力についての本研究の結果から示唆されることは以下の通りである。

1) 異文化能力及び異文化間コミュニケーション能力は通訳者が業務遂行において成功を収める上で重要である。そのため、この重要性を通訳の授業で強調し、日本・タイの文化、サブカルチャー、

文化接触に関する知識・認識を高める活動を行うことが効果的であると考えられる。例えば、授業内外でオンラインでも対面式でも教師ではない日本人とコミュニケーションを行う活動などである。

2) タイ人日本語通訳者は、日本語や日本文化、日本社会に関する知識を持ち、オープンな態度をとり、異文化間の違いを理解し受け入れることができている。しかし、実際の異文化間コミュニケーションにおいて誤解や失敗が起こることがあり、その失敗例の詳細を今後、通訳教育に活用することができると思う。例えば、通訳の授業で、日本人とのコミュニケーションにおいていかなる誤解や失敗が起こるか具体的な例を取り上げて解決法を考えるなどである。

本研究がタイ人日本語通訳者及び日本語学習者の異文化に対する意識を高め、異文化間コミュニケーションの問題を解決するために貢献できることを期待する。また、タイにおける人材育成のための異文化間コミュニケーション、通訳教育の一助になれば幸いである。

References

- กนก รุ่งเกียรติกุล. (2566ก). *ฝึกฝนกลยุทธ์ล่ามภาษาญี่ปุ่นเบื้องต้น*. ภาควิชาภาษาปัจจุบันตะวันออก คณะอักษรศาสตร์ มหาวิทยาลัยศิลปากร วิทยาเขตพระราชวังสนามจันทร์.
- กนก รุ่งเกียรติกุล. (2566ข). การวิเคราะห์ข้อมูลสะท้อนกลับจากผู้เรียนเพื่อพัฒนาการเรียนการสอนวิชาการแปลแบบล่ามภาษาญี่ปุ่น. *วารสารอักษรศาสตร์และไทยศึกษา*, 45(2), 1-19.
- ฐนิตา สุวรรณกิตติ. (2551). *ความต้องการล่ามในงานสาธารณสุขไทย กรณีศึกษาโรงพยาบาลเอกชน 3 แห่งในเขตกรุงเทพมหานคร* [วิทยานิพนธ์ปริญญาโทมหาบัณฑิต ไม่ได้ตีพิมพ์]. จุฬาลงกรณ์มหาวิทยาลัย.
- ณัฐริธา ทับทิม. (2564). ความสามารถในการแปลความหมายระดับข้อความของ Google Translate ระบบ Neural Machine Translation จากภาษาญี่ปุ่นเป็นภาษาไทย. *วารสารศิลปศาสตร์*, 21(1), 90-113.
- ณัฐริธา ทับทิม. (2565). ปัญหาการล่ามภาษาญี่ปุ่นเฉพาะทางในสายงานอุตสาหกรรมผ่านการวิเคราะห์เชิงภาษาศาสตร์: กรณีศึกษาการล่ามในสถานการณ์จำลองสายงานอุตสาหกรรม. *วารสารเครือข่ายญี่ปุ่นศึกษา*, 12(2), 147-166.
- ธารทิพย์ แก้วทิพย์. (2545). การแปลแบบล่าม: แนวคิดเชิงทฤษฎีและวิธีปฏิบัติ. *วารสารศิลปศาสตร์*, 2(1), 21-42.
- นันทชญา มหาจันทร์. (2556). *รายงานวิจัย การทำงานภายใต้วัฒนธรรมที่แตกต่าง: ปัญหาและความคาดหวังของบริษัทญี่ปุ่น*. คณะมนุษยศาสตร์และสังคมศาสตร์ มหาวิทยาลัยบูรพา.
- บุษบา บรรจงมณี. (2547). รายงานการศึกษาความต้องการใช้งานล่ามภาษาญี่ปุ่น-ไทยและแนวทางพัฒนาการสอนวิชาการแปลแบบล่าม. *วารสารมนุษยศาสตร์*, 12, 12-26.
- บุษบา บรรจงมณี. (2549). *ทางลัด...สู่ล่าม 通訳への道*. สำนักพิมพ์ภาษาและวัฒนธรรม.
- ปนัดดา ศิริพานิช และ นุราฮิมะ โมเอ็ด ยูโซฟ. (2561). ทักษะและลักษณะความสามารถในการสื่อสารข้ามวัฒนธรรม: การนำมาปรับใช้ในชั้นเรียนการสอนภาษาอังกฤษในประเทศไทย. *วารสารศึกษาศาสตร์มหาวิทยาลัยทักษิณ*, 18(1), 116-127.
- พัชยา โสภณสิทธิพงศ์. (2560). การเปลี่ยนแปลงของสภาวะการทำงานกับการลาออกจากงานของล่ามภาษาญี่ปุ่นในบริษัทญี่ปุ่นเขตนิคมอุตสาหกรรมภาคเหนือ จังหวัดลำพูน. *วารสารญี่ปุ่นศึกษานับพิเศษ 2560*, 172-185.
- มธุรส แพทย์ชีพ และ ชินฮาระ โนบุอากิ. (2562). ปัญหาการสื่อสารของชาวญี่ปุ่นในการเข้ารับบริการในโรงพยาบาลรัฐของไทย. *วารสารภาษา ศาสนา และวัฒนธรรม*, 8(1), 241-268.
- รัชณี ปิยะธำรงชัย. (2561). บทบาทและปัญหาความแตกต่างทางวัฒนธรรมในการทำงานของล่ามภาษาญี่ปุ่นชาวไทยภายใต้บริบท “ความเป็นญี่ปุ่น”: กรณีศึกษาบริษัทญี่ปุ่นในนิคมอุตสาหกรรมของไทย. *วารสารภาษา ศาสนา และวัฒนธรรม*, 7(2), 51-90.

- วรรณิดา ยืนยงค์ และ สมเกียรติ เขวงกิจวงษ์. (2562). บทบาทหน้าที่ของล่ามและปัญหาการล่ามภาษาญี่ปุ่นชาวไทยในโรงงานอุตสาหกรรมของประเทศไทย. ใน จันทิมา อังคพนิชกิจ, *รายงานสืบเนื่องจากการประชุมวิชาการบัณฑิตศึกษาระดับชาติ สรรพศาสตร์สรรพศิลป์ ประจำปี 2562* (441-461). คณะศิลปศาสตร์ มหาวิทยาลัยธรรมศาสตร์.
- สิริขวัญ สงวนผล. (2555). ญี่ปุ่นกับการให้บริการล่ามทางการแพทย์เพื่อผู้ป่วยชาวต่างชาติ. *วารสารญี่ปุ่นศึกษา*, 29(2), 92-107.
- สิริขวัญ สงวนผล. (2556). *ล่ามการแพทย์ (ภาษาไทย-ญี่ปุ่น) ในโรงพยาบาลเอกชนของประเทศไทยและแนวทางการฝึกอบรมล่ามการแพทย์* [วิทยานิพนธ์ศิลปศาสตรมหาบัณฑิต ไม่ได้ตีพิมพ์]. มหาวิทยาลัยธรรมศาสตร์.
- Byram, M. (1997). *Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence*. Multilingual Matters.
- Chen, G. M. (2014). Intercultural Communication Competence: Summary of 30-year Research and Directions for Future Study. In X. Dai & G. M. Chen (Eds.), *Intercultural Communication Competence: Conceptualization and its Development In Cultural Contexts and Interactions* (pp. 14-40). Cambridge Scholars Publishing.
- Deardorff, D. K. (2006). The Identification and Assessment of Intercultural Competence as a Student Outcome of Internationalization at Institutions of Higher Education in the United States. *Journal of Studies in International Education*, 10(3), 241-266.
- Gray, J. H., & Densten, I. L. (1998). Integrating Quantitative and Qualitative Analysis Using Latent and Manifest Variables. *Quality & Quantity*, 32, 419-431.
<https://doi.org/10.1023/A:1004357719066>
- Ho, S. (2009). Addressing Culture in EFL Classrooms: The Challenge of Shifting from a Traditional to an Intercultural Stance. *Electronic Journal of Foreign Language Teaching*, 6(1), 63-76. <https://e-flt.nus.edu.sg/v6n12009/ho.pdf>
- JETRO. (2021). *Trend Survey of Japanese Companies in Thailand 2020*.
https://www.jetro.go.jp/thailand/topics/_466649.html
- Ministry of Foreign Affairs of Japan. (2023). *Japan-Thailand Relations (Basic Data)*.
<https://www.mofa.go.jp/region/asia-paci/thailand/data.html>
- Nida, E. A., & Taber, C. R. (1969/2003). *The theory and practice of translation*. Brill.
- Nishikito, E. (2017). An Analysis of the Teamwork between Doctors and Medical Interpreters: Derived from Simulated Consultations Mediated by Japanese-Thai Interpreters. *jsn Journal Special Edition 2017*, 186-203.

- Palinkas, L. A., Horwitz, S. M., Green, C. A., Wisdom, J. P., Duan, N., & Hoagwood, K. (2015). Purposeful sampling for qualitative data collection and analysis in mixed method implementation research. *Adm Policy Ment Health, 42*(5), 533-544.
- Popping, R. (2015). Analyzing open-ended questions by means of text analysis procedures. *Bulletin de Methodologie Sociologique, 128*, 23-39.
<https://doi.org/10.1177/0759106315597389>
- Pöschhacker, F. (2010). Interpreting Studies. In Y. Gambier & L. van Doorslaer (Eds.), *Handbook of Translation Studies, Volume 1* (pp. 158-172). John Benjamins Publishing Company.
- Thanakorn, T., Ladda, W., Rungtiwa, Y., & Wilailak, L. (2020). Intercultural Communicative Language Learning Competencies of Undergraduate Students in an International Programing Thailand. *THAITESOL JOURNAL, 33*(2), 1-19.
- Watanabe, Y. (2012). Japanese Interpreters in Bangkok's International Hospitals Implications for Intercultural Communication between Japanese Patients and Thai Medical Providers. *The Japan Journal of Multilingualism and Multiculturalism, 18*(1), 19-38.
- Yamamoto, K. (2020). Job Needs and Task Analysis of Japanese-Speaking Thai Translators and Interpreters: Implications for Japanese Language Education. *Humanities, Arts and Social Sciences Studies, 20*(10), 65-89.
- 小松達也. (2022). 『通訳の技術』 (13刷) 研究社.
- 関根マイク. (2020). 『通訳というおしごと』 アルク.
- 竹井光子[他]. (2021). 「異文化間能力 Can-Do による学生の意識調査—国際教育カリキュラム検証への示唆—」. 『広島修大論集』 61(2), 35-51.
- 鳥飼玖美子. (2021). 『やわらかアカデミズム・(わかる) シリーズ よくわかる翻訳通訳学』 ミネルヴァ書房.
- 松浦依子・宮崎玲子・福島青史. (2012). 「異文化間コミュニケーション能力のための教育とその教材化について：ハンガリーの本語教育教科書『できる』作成を例として」. 『国際交流基金日本語教育紀要』 8, 87-101.
- 松本佳穂子. (2013). 「異文化間能力の指標と指導モデル構築の試み」. 『文明』 18, 51-63.